

French-Japanese workshop at IFSTTAR 参加報告書

黒井産業(株)R45・日の出自動車学校

奥山 祐輔

1. 参加の経緯と内容

今回の参加メンバーの中で私だけがインストラクターを本務としています。私は指定自動車教習所の教習指導員、技能検定員であり、他には国土交通省第一種講師及び第一種カウンセラー、そして交通心理士として交通教育の現場で様々なドライバー教育の実務に従事しています。

今回の日仏ワークショップ開催の話を目にしたときは、研究者が対象との先入観がありました。しかし実際にはそのような制約はないことを知りチャレンジしました。

発表テーマは“Development of older driver’s education program for meta-cognitive skill”として、当校の高齢者講習で実施しているミラーリング法（双方向講義）と自己観察・自己評価法（個別指導）について、コーチングを取り入れた教育プログラムの実施事例及び教育効果の一部について発表しました。

フランスの交通教育はシミュレーターなどの最新機器を積極的に取り入れており、その中で“対話を重視”した当校の教育プログラムが受け入れられるか不安でした。発表後にフランスの研究者に声をかけてもらえたりしまして、少しは興味を持ってもらえたようにも思いますが、“対話重視”のプログラムであるからこそ、有効性を知ってもらうには私自身のプレゼン能力やコミュニケーション能力をもっと高める必要があると感じました。



発表の様子

2, フランス滞在

今回は現地（ヴェルサイユ）集合ということで、一人で日本を出発した私は、発表の前に現地に“無事到着する”ということが第一目標でした。移動の中で徒歩や列車はもちろん、タクシーも何度か利用しました。私が最近多く取り組んでいる実務教育のなかにタクシードライバーの安全教育があり、異国のタクシードライバーの運転行動は興味がありました。同乗した感想は、スピードや側方間隔などが日本のドライバーと全く違い、特にパリ市街地の走行は、もしも教習車であれば補助ブレーキと補助ハンドルを常に離せないくらいのスリリングなものでした。しかし、その中で一時停止は完全に停止するといった少々不思議な場面もありました。文化や環境や習慣の違いによるものなのかは分かりませんが、ドライバーの特性につきましてさらに興味が深まりました。



集合場所：Versailles Chateau Rive Gauche 駅前

3, 今後の展望

シミュレーター等が中心のフランスの研究者の発表でしたが、“awareness”といった私も今回のプログラムでキーワードにしたワードが出てくることもあり、“気づきを支援する教育方法”は文化や習慣が違っても有効的であると感じました。私は教育プログラムの立案や開発は我々実務家の得意なフィールドだと考えています。将来、フランスと日本の研究者による共同研究の成果から我々実務家が教育プログラム開発につなげるといった方向性が確立できるよう、さらに研鑽を積み重ねていきたいと思えます。

最後にこのような機会を与えていただきました日本交通心理学会及び関係者の皆さまに深く御礼申し上げます。